



比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」

日本宗教代表者会議

The Japan Conference of Religious Representatives

比叡山メッセージ 2017

本年、比叡山宗教サミットは30周年を迎えた。1987年8月、世界の平和を祈るべく、我々は宗教・宗派の垣根を越えてこの地、比叡山に参集した。それは前年10月、諸宗教の指導者が集まったアッシジにおける「世界平和祈願の日」の、あの開かれた精神を継承するものであった。やがて我々と思いを同じくする宗教者によって、世界各地で諸宗教による平和の祈りが捧げられ、宗教間の対話や協働の輪が広がりを見せている。この度の「世界宗教者平和の祈りの集い」に参加した我々は、真摯な祈りを捧げるとともに、世界のすべての人々に心からのメッセージを贈りたいと思う。

今や世界は、排他的傾向が広がり、対立と分裂への動きが深刻化していることを、我々は憂慮する。かつてスマトラ沖大地震や東日本大地震など自然災害が人々を容赦なく襲い、絶望の淵に追いやった。そのとき、国際機関や各国政府の救援はもとより、国内外から多くのボランティアや宗教者が馳せ参じ、支援の手を差し延べたことは記憶に新しい。その国境を越えた人々の献身や連帯の姿に、一筋の光明を見る思いがしたのであった。

ところがその後、ヨーロッパ各地では市民の憩いの場を狙うテロが頻発した。その行動は、政府や公共機関に打撃を与えるばかりでなく、罪のない市民に対するいわれの無い攻撃でもあった。それはまた、豊かな消費を謳歌する一部の現代文明への怨念を表すものでもある。一方、中近東などの地域では長期にわたって戦闘や空爆が続き、多くの住民が犠牲になり、また難民生活を余儀なくされている。地球社会には、テロや国家暴力を抑えきれないことへの絶望も広がっている。

我々宗教者はいかなる理由があろうとも、尊いいのちを軽んずる暴力を認めることはできない。格差社会で排除され抑圧されている人々の苦難もまた忘れることはできない。差別や不公正を許さない社会の実現のために、宗教者にもその責任があることを胸に刻み、我々は市民社会と強力な連帯を構築していくことを決意する。

いのちの尊さを考えるとき、環境問題の重要性もまた認識しなければならない。すべてのいのちを育む地球が、人間の欲望の犠牲となることを放置すれば、温暖化がいつそう加速して取り返しのつかない結果となることは自明の理であり、我々は警鐘を鳴らすものである。

人類を滅亡に追いやる核兵器の廃絶は、高齢になった被爆者が存命している今こそ、さらに強く訴えていくべきである。原子力発電所の事故による災害や環境汚染を何度も経験してきた人類社会は、将来世代にきわめて大きな負荷を及ぼす原子力の利用の限界を深く

自覚しなければならない。我々は核廃棄物を残す核エネルギーの利用に未来がないことを強く訴える。

いのちの尊さが脅かされている背景には、現代の政治・経済体制の問題があることを認識しなければならない。近年、科学技術と経済機構があいまって人間の欲望を刺激し、そこから利潤を引き出すことのみで追われる傾向が強まっている。たとえば動植物のゲノム改変を推し進めるだけでなく、新たな生命科学を用い人間という種のあり方までも変えてしまう可能性も危惧されている。人類の倫理的自覚が科学技術の発展に追いつかず、特に核開発以後、それは顕著になっていて、人類の福祉のために科学技術を方向づけることがますます困難になってきている。まさに今、世界の諸宗教が培ってきた叡智をもって、倫理的な吟味を踏まえた科学技術の発展を求めるべきときである。

国連は2015年に持続可能な開発目標SDGsを満場一致で採択し、次の15年間に向けてのさまざまな取り組みを始めた。これは、従来そのままのありかたでは、地球社会の持続が不可能であるという危機感のもとに、世界を変革するというゆるぎない意志を示すものである。この開発目標は取り組みの過程で「地球上の誰一人として取り残さない」というもので、まさに宗教者の立場と一致しており、これを強く支持したい。

とくにSDGsでは公平で質の高い教育をめざしている。我々も、教育は人格陶冶の第一歩であり、心に平和の砦を築くために欠くことのできないものと考え。すなわち平和を脅かす倫理観の欠如や正義の歪みを正し、欲望を制御し、愛や慈悲に満ちた豊かな人間性を育むために、教育は宗教的基盤とともに、欠くべからざるものであるからだ。したがってこの課題は、宗教コミュニティがもっとも協力できる分野であることを表明する。一方、宗教コミュニティの中に暴力や差別を動機づけ、教育の自由と平等を阻害するグループがあれば、我々は辛抱強く説得する責任をもつものである。

これまで人類が直面する諸問題を解決するために、我々は国連などの国際機関と連帯し、また各種条約による枠組みに沿って対処する努力を行ってきた。ところが最近、先進国の中でも経済構造の変動により、格差問題が深刻化するようになり、国際的連帯より自国中心主義が主張されはじめた。しかし先進国の繁栄は自国の努力のみならず、発展途上国に支えられてきた側面を忘れてはならないだろう。平和を考えると一番重要なのは、他者の存在を受け容れ、弱者に対する配慮を欠かさないことである。

30年前、我々は「宗教者は常に弱者の側に立つことを心がけねばならない」と世界に宣言した。しかしその責務を十分に果たしてきたとはいえないことを、率直に告白せざるを得ない。そこで改めてここに決意を新たにし、宗教者の連帯の絆をいっそう強め、「忘己利他」の精神で平和のために献身することを誓うものである。

憎悪と排除からは争いしか生まれぬ。忍耐強い対話と他者の存在を受け容れる努力こそ、平和への近道であることを強く訴える。そして我々の切なる願いが神仏に聞き届けられるように祈り、行動していくことをここに宣言する。

2017年8月4日

「世界宗教者平和の祈りの集い」参加者一同